ウィタ・フンニョアリス

安岡章太郎編 ✧ VITA FUNNYOALIS

O TEMPORA O MORES !

ヴィタ・フンニョアリス

安岡章太郎編 ✧ VITA FUNNYOALIS

講談社

ウィタ・フンニョアリス

昭和五十五年十二月十六日　第一刷発行

定　価　一二〇〇円
編　者　安岡章太郎
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)　振替　東京八―三九三〇
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　株式会社堅省堂

落丁・乱丁本はおとりかえします。

© Shotaro YASUOKA 1980, Printed in Japan.

0098-133021-2253 (0)　(翻)

目

次

追いかけるUNKO　吉行淳之介 7
神聖な糞虫　北杜夫 10
小便がつまる　入江相政 19
朝昼晩　志賀直哉 25
厠のいろいろ　谷崎潤一郎 38
糞尿薬の話　渡辺一夫 47
好色（こうしょく）　芥川龍之介 54
寝小便に泣く男　遠藤周作 73
わが糞尿譚　安岡章太郎 86
黒い煎餅　阿川弘之 98
おべんじょ　田辺聖子 112
酒（さけ）・飯（めし）・雪隠（せっちん）　平野雅章 117
押入れの中　円地文子 120

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

モースの便所　畑　正憲 130
トイレット天国　李家正文 136
バリュームさわぎ　白井浩司 147
食事と排泄　星　新一 151
ゾウの大グソ　中村　浩 153
糞尿の話　金子光晴 158
中国水火譚　駒田信二 164
「放屁抄」蛇足　安岡章太郎 177
スウィフト考　山田　稔 184
粉屋の話　チョーサー／西脇順三郎訳 195
尻を拭く妙法を考え出したガルガンチュワの優れた頭の働きをグランググゥジエが認めたこと　ラブレー／渡辺一夫訳 218

オイレンシュピーゲルがマイン河のほとりのフランクフルトで、ユダヤ人をたぶらかして千グルデンだまし取った物語。つまり、自分のうんこを「予言者の実」といつわって、彼らに売りつけた次第　作者不詳／藤代幸一訳 226

路易十一世飄逸記　バルザック／小西茂也訳 229

放屁論　風来山人／いいだ　もも訳 254

あとがき　編者 263

ウィタ・フンニョアリス

装丁　田村義也

追いかけるUNKO

吉行淳之介

舞台装置は、ロマンチックである。

A君は大男である。齢も若い。しかし、体格に似合わず内気なところがあり、不器用なところもあって、ほかのすばしっこい青年たちのように、どんどんガールフレンドをつくることができない。

そういうA君にも、ようやく幸運がめぐってきた。きれいな女の子と、小旅行に出かける約束ができた。

真夏のことで、山の湖に行くことになった。女の子が旅行に出かけることを承諾したとなればもう安心してよろしい。花咲き鳥うたう心持で、A君は勇んで出発した。

湖畔に着くと、ボート屋があった。

「ボートに乗りましょう」

とA君は、一層勇み立った。学生のころボート部で、腕におぼえがある。いいところをみせよ

うというわけで、太い腕でオールを握り、エイッエイッと漕いでゆく。
「すてき、すてき、こんなに速く進んでゆくわ」
と女の子がよろこぶので、A君は力漕また力漕である。
ところが、湖のまん中に出たころ、まことに具合の悪いことが起った。つまり、便意を催してきたのである。
湖の岸は、遠く霞んでみえる。とても引返す暇がないくらい、烈しくなってきた。
「ああ、いい景色だなあ」
進退きわまってA君は、あたりを見まわして、
「きれいな水だなあ、ぼかあ、突然、泳ぎたくなってきたぞ」
海水パンツははいていない。ブリーフ一枚になって、水に飛び込む。片手をボートの端にかけて立泳ぎしながら、そろりとブリーフをずらして尻を出した。
「ああ、冷たくていい気持だよ」
などと誤魔化しながら排便していたのだが、よほど蓄っていたとみえてなかなか終りにならない。
「あっ」
という声が、そのとき聞えた。
ボートの上で、彼女が眼を見張り、口を半ばあけて、驚愕の様子なのだ。オバケを見たとそっくりの顔である。振返ってみると、水の上に長々とUNKOが連なって、それがまたどんどん長

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

さを増してゆく。

これはいかんと、尻の穴をすぼめてみるが、長く連なったやつが、どうしても切れない。あわててボートの端から手を離し、泳ぎ出す。UNKOから逃げようとするわけだが、その長々としたやつは、A君から離れず追いかけてくる。

水の中でのUNKOが途中で切れないのは、金魚の場合と同じである。「助けてくれ」と心の中で叫びながら逃げるが、どこまでも追いかけてくる。

〔よしゆき・じゅんのすけ（一九二四―　）作家〕

神聖な糞虫

北杜夫

古代エジプト人の「神聖な甲虫」スカラベ・サクレは、ファーブルの『昆虫記』によって、あまねく世に知られるようになった。糞を食べるだけでも変り者なのに、この甲虫「玉押しコガネ」は、糞を丸く玉にしてころがしてゆくのである。偉大な労作『昆虫記』の冒頭はこの虫のことで始まり、また第五巻に至って追加の章が書かれている。

かつて、ナイル河が定期的に大増水しては肥沃な土壌をのこし、そこに人類最初の文明が栄えだしたころ、この虫はやはり燃えるような太陽の下で糞玉をおしていた。エジプト人はさまざまな動植物、自然現象のなかに、それぞれの霊魂を見た。彼らがこの虫を神聖なものとして礼拝し、壁画に描き、守り札に描き、彫刻につくって首飾りとしたのは偶然ではない。

今でもポート・サイド、アレキサンドリアなどのミヤゲ物店へ行くと、石造りのスカラベを売っている。たいていは青緑色のもので、白い木製のものもある。裏側にはあやしの模様が彫られてある。むかしはこれを印形（いんぎょう）に使った。ピラミッドなどから発掘された石細工のスカラベの模造

品なのである。「ホンモノヨ」などと言っておそろしく高いことを言う宝石屋があるが、むろん当てにしてはならぬ。本物は博物館へ行けば見られる。大きいのや小さいのやいろんな色どりの石のスカラベが、何百となくガラスの陳列台の中におさめられている。古代の王の墓には、鳥、猫、鰐に至るまで保存されているのだから、ちっぽけな甲虫の彫刻の千や二千はなんでもない。

なぜこの虫が神聖視されたかというと、毎年氾濫をするナイル河の水がひくと、この甲虫はまっさきに現われてくる。昔はこの虫には雌がないと思われていた。にもかかわらず彼らはナイルのほとりに群れてくる。古代エジプト人が世界の再生、新生とむすびつけて考えたのも無理ではない。また現代でも多産の象徴とされ、地方の女たちは子供が授かるようにこの虫を食べるという。べつに回教の断食でお腹がすいたあまり、虫でも何でも食べてしまうのとはちがうのである。

スカラベは糞玉をこしらえる。それははなはだ人工的なすべすべした玉で、とても虫の造作物とも思えない。その玉を日の出から日没までくるくるころがしてゆくため、エジプト人はこれを太陽の回転ともむすびつけた。さらにこの虫のつくる玉は二十八日間地中におかれ、それから新しい虫が現われると信じられていたため、エジプト人たちは一年を二十八日ずつの月にわける月の象徴とも考えた。

すべてはナイル河からはじまったのだ。ナイルの氾濫期から氾濫期までを数えて、一年を三百六十五日としたのもエジプト人の発明である。だが、スカラベはそんなことには関わりなく、自分らが神聖視されていることにも気がつかず、古代から現在まで営々と糞玉をこしらえている。

彼らはエジプトを発祥地とする。南フランスにも分布していて、ファーブルの『昆虫記』を彩どった。同族の者は朝鮮にもいる。また台湾にも近似の玉をころがす種類が棲んでいる。

この甲虫は羊や馬や牛の糞を食べる。こういった連中はほかにも沢山いる。しかしスカラベだけは、その場で食べずに糞玉をこしらえるところが変っている。

スカラベは体長二センチ半ばかりのつやつやと黒いコガネムシの一種だ。頭にも前肢にもギザギザがついていて、ちょっとエキセントリックで、ほとんど美しいと言ってもよい。獣たちのおとしものの匂いがすると、彼らは飛んだり這ったりして駈けつけてくる。

それからギザギザのある頭と肢とで糞のおいしそうなところをかきとり、そいつをかかえこみながら、四本の肢で巧みに回転させ、だんだんと丸くする。新しい糞をつぎたし、ぬったり叩いたりして、ついには見事な糞玉をこしらえあげてしまう。

それから、いよいよ「玉押しコガネ」の名のとおり、そいつを運びはじめる。彼らは逆立ちのような恰好をする。前肢を地につけて、長い後肢で糞玉をかかえ、うしろむきに押してゆく。古代のエジプト人はそのさまを見てびっくりしたのにちがいない。虫は前をむいているのに糞玉はうしろむきにまわってゆく。太陽と同じく、自分は東むきに進みながら、玉を西むきにころがしているように見てとったのだ。

彼らは辛抱づよく営々と玉をおしてゆく。坂だの石ころだのにつまずこうが、玉がころげおちて自分がひっくりかえろうが、いささかもへこたれない。こうして、前もって砂地に掘ってあっ

た自分の穴まで糞玉を運んでゆき、その中に糞玉と一緒にもぐりこんで、はじめて豪華な食事を開始するのだ。

面白いことに、玉を運んでいる最中、べつのスカラベがやってきて手を貸すことがある。ところがこれは親切気ではなく、隙があったら糞玉を盗もうとする横着者であることをファーブルは観察した。暴力で盗もうとする奴もある。そういうときには一つの糞玉をかこんで二匹が戦闘を開始する。掠奪者はふいに相手をつきとばし、ひっくりかえしておいて、その間に糞玉の上によじのぼり、さあ来いと前肢をかまえて待ちうけている。やっと起上ったもう一匹は、玉のまわりをぐるぐるまわって隙をうかがう。相手も玉の上でぐるぐるまわる。ときには両方ともころげ落ちてとっくみあいが始まるが、そうなると、はたしてどっちが正当な糞玉の所有者なのか見わけがつかなくなる。結局、ケンカに負けたほうが糞玉をあきらめ、すごすごと新しい糞玉つくりに出かけてゆくというわけだ。

そんな邪魔がはいらずに、糞玉を地中にひきいれて食事をはじめることができた場合、これがたいへん長い食事になる。何日も、ときには一週間も、昼でも夜でも彼らは糞玉にかじりついている。食べながら彼らは糞をする。糸のようにほそい糞を、スカラベは食事をしながら間断なくだしている。ファーブルがこの糞の長さを測ったところ、十二時間で二メートル八十センチになった。そしてその容積は、彼らの身体の容積と同じだったという。

ファーブルはスカラベを観察のために飼っていた。その食料を手に入れるため、彼は隣りの大家の家の下男を手なずけた。大家は馬を飼っている。ファーブルは下男に銀貨をやり、その代り

下男は毎朝、庭の仕切りの土塀の上に顔をだし、「お隣りの旦那」とよんで、山もりの馬糞をわけてくれていた。ところがたまたまこの光景を大家が見つけてしまった。大家は自分の畠にやるべき肥料をみんなファーブルがくすねていると思いこみ、いくら弁解してもききいれようとしなかった。そのためファーブルは街道へでて、人目を忍んで、馬やロバの落しものを拾ってこなければならなくなった。あるとき、野菜をアヴィニョン市場へ運ぶロバが、ファーブルの家の戸口のまんまえで貢物をおとしてくれたとき、彼は「棚からボタ餅」という顔でニコニコと笑った。

ファーブルは、スカラベが糞玉を自分で食べるだけでなく、幼虫をもそれで育てるにちがいないと考えた。そこで彼は近所の子供たちを集め、糞玉を示し、もし中にウジのいる団子を見つけたら、ピカピカした新しい一フラン銀貨をやろうと約束した。手つけに幾スウかをくばってやったので、子供たちは喜んで散っていった。ファーブルは捜しものが必ず見つかると信じていた。ところが一フランをかけても、どの子供もそんなウジのいる糞玉をついに持ってきてくれなかったのだ。

年月がたって、ファーブルがそれまでに観察した「神聖な昆虫」の話を『昆虫記』第一巻に書いてしまってからまた何年かたって、一人の羊飼いが西洋梨そっくりの鳶色のものを持ってやってきた。彼はスカラベが地面から出てくるところを見つけ、そこを掘ったところ、その西洋梨の雛形を見つけたのである。さすがのファーブルも、それが虫がつくったものであるとは信じられなかった。それは瑪瑙の玉より美しく、黄楊の独楽よりも優雅であった。子供の玩具箱に入れてやりたくなるような細工物といってよかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com